６　次の文章を読んで、後の設問に答えよ。　　〈千葉大〉二〇二一年度出題

　高倉院の法華堂の三昧僧、なにがしの律師とかやいふ者、ある時、鏡を取りて顔をつくづくと見て、我がかたちのみにくく、あさましきことを、余りに心憂く覚えて、鏡〔　　Ａ　　〕うとましき心地しければ、その後長く鏡を恐れて手に〔　　Ｂ　　〕取らず、さらに人に交はることなし。御堂の勤めばかりにあひて、籠り居たりと聞き侍りしこそ、①ありがたく覚えしか。

　げなる人も、人の上をのみはかりて、おのれをば知らざるなり。我を知らずして、を知るといふ理あるべからず。されば、おのれを知るを、物知れる人といふべし。かたちみにくけれども知らず、心の愚かなるをも知らず、芸の拙きをも知らず、数ならアぬをも知らず、年の老いぬるをも知らず、病の冒すをも知らず、死の近きことをも知らず、行ふ道の至らざるをも知らず。身の上の非を知らねば、まして外のりを知らず。ただし、かたちは鏡に見ゆ。年は数へて知る。我が身のこと知らぬにはあらねど、すべき方のなければ、②知らぬに似たりとぞ言はまし。

　かたちを改め、齢を若くせよとにはあらず。③拙きを知らば、何ぞやがて退かざる。老いイぬと知らば、何ぞ閑に居て身を安くせざる。行ひおろそかなりと知らば、④何ぞこれを思ふこと、これにあらざる。

　すべて、人にせられずして衆に交はるは恥なり。かたちみにくく、心おくれにして出で仕へ、無智にして大才に交はり、不堪の芸をもちての座に連なり、⑤雪の頭を頂きて盛りなる人にならび、況んや、及ばざることを望み、かなはウぬことを憂へ、来たらざることを待ち、人に恐れ、人に媚ぶるは、人の与ふる恥にあらず、貪る心にひかれて、⑥自ら身を恥づかしむるなり。貪ることのやまざるは、命を終ふる大事、今ここに来たれりと、たしかに知らざればなり。

（『徒然草』による）

（注）　○高倉院の法華堂―高倉上皇の御陵にある法華堂。

○三昧僧―経を読誦したり念仏をしたりする専従の僧。

○律師―僧正・僧都に次ぐ僧官。

○行ふ道―仏道修行。

○堪能―よくその道に通じて巧みなこと。

問１　空欄〔　Ａ　〕、〔　Ｂ　〕には、次のいずれかの語が入る。それぞれ選んで、記号で答えよ。ただし、各記号は一度しか使えないものとする。

ア　だに　　イ　ながら　　ウ　さヘ　　エ　より

問２　二重傍線部ア～ウの助動詞「ぬ」のうち、文法的に異なっているものを一つ選んで、記号で答えよ。また、その文法的意味と活用形を答えよ。

問３　傍線部①「ありがたく覚えしか」、②「知らぬに似たりとぞ言はまし」を、それぞれ現代語訳せよ。

問４　傍線部③「拙きを知らば、何ぞやがて退かざる」を、適宜ことばを補って、現代語訳せよ。

問５　傍線部④「何ぞこれを思ふこと、これにあらざる」について、二つの「これ」がそれぞれ何を示しているかを明らかにしつつ解釈せよ。

問６　傍線部⑤「雪の頭を頂きて」とは、どのようなことを言ったものか。文中から五字以上十字以内で抜き出して答えよ。

◎問７　傍線部⑥「自ら身を恥づかしむるなり」とあるが、我が身を恥ずかしめないために、筆者はどのようにしたらよいと考えているか、筆者が考える「恥」の内容を具体的に明らかにしつつ説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　Ａ＝ウ　　Ｂ＝ア

問２　イ・完了・終止形

問３　①＝ＡめったになくすばらしいことだとＢ思われ Ｃた

Ａがなければ全体０。「めったにない」だけの場合は減点５。Ｂが「思う」の場合は減点３。Ｃの過去の意味がなければ減点３。

　　　②＝Ａ知らないのと同じことだと言うのＢだろう

Ａがなければ全体０。Ｂがなければ減点３。「かもしれない」も可。

問４　Ａ自分が劣っていることを知ったら、Ｂどうしてすぐに引退しないのか

Ａ＝３〔「自分が」がなければ減点２。「自分の芸」も可。仮定条件になっていないものは減点２。〕

Ｂ＝７〔反語のニュアンスがなければ０。「すぐに」がなければ減点３。「引退する」は「身を引く」も可。〕

問５　Ａ仏道修行が不十分であることを考えるのは、Ｂどうして自分自身ではないのか

Ａ＝５

Ｂ＝５〔反語のニュアンスがなければ０。内容は自分のこととして書いてあればよい。〕

問６　年の老いぬる（6字）

問７　Ａ人に好かれないのに人と交際することや、Ｂ自分の力の及ばないことを願うなどの貪欲さが恥なので、Ｃこの世は無常で、命には限りがあることを自覚して生きるのがよいと考えている。

Ｃがなければ全体０。Ａ・Ｂどちらかの恥の内容がなければ全体０。片方のみは減点４。

［別解］Ａ自分自身を知らずに往生際の悪いふるまいをし、Ｂ貪欲な心によって様々な醜態を招くことが恥なので、Ｃこの世は無常で、命が今ここで尽きてしまうかもしれないことを意識するのがよいと考えている。

Ｂ・Ｃ両方なければ全体０。Ａがなければ減点４。Ｂの「醜態を招く」はなくても可。

【現代語訳】

　高倉院の（御陵にある）法華堂の三昧僧で、の律師とかいう人が、ある時、鏡を（手に）取って顔をつくづくと見て、自分の容貌が醜く、あきれるほどひどいことを、あまりにも情けなく思われて、（自分の容貌に加えて）鏡までもが厭わしく思う気持ちがしたので、その後長く鏡を恐れて（見るのはもちろんのこと）手に取ることさえせず、全く人と交際することがない。法華堂の勤行にだけ参加して、籠もっていたと聞きました（が、この）ことこそ、　　　　　問３①めったになくすばらしいことだと思われた。

　賢そうに見える人も、人の身の上ばかりを推測して、自分のことは知らないのである。自分自身を知らずに、他人を知るという道理があるはずはない。だから、自分を知る（人）を、物事がわかっている人と言うべきである。容貌が醜くても（それを）知らず、心が愚かであることも知らず、芸が下手であるのも知らず、（自分が）ものの数に入らないことも知らず、年老いたことも知らず、（自分の体を）病気が冒すのも知らず、死が近いことも知らず、仏道修行が未熟であることも知らない。（自分の）身の上の欠点を知らないので、まして他の（人の自分に対する）非難を知らない。ただし、容貌は鏡で見える。年齢は数えてわかる。我が身のことを知らないのではないが、なすべき方法がないので、問３②知らないのと同じことだと言うのだろう。

　（こういう人たちに）容貌を（立派に）改めて、年齢を若くせよというのではない。問４（自分の芸が）劣っていることを知ったら、どうしてすぐに引退しないのか（引退すべきだ）。年老いたことを知ったら、どうして静かに暮らして体を安楽にしないのか（安楽にすべきだ）。仏道修行が不十分であることを知ったら、問５その仏道修行が不十分であることを考えるのは、どうして自分自身ではないのか（自分自身で反省すべきだ）。

　だいたい、人に好かれないのに大勢の人と交際するのは恥である。容貌が醜く、思慮が乏しいのに出仕し、無知なのに博学の人と交際し、下手な芸によってよくその道に通じて巧みな人たちと（同じ）座に連なり、雪のような白髪を頭にのせて若くんな人たちと肩を並べ、ましてや、（自分の力では）及びもしないことを望み、成就できもしないことを悲しみ、来もしないことを待ち、他人（に対してつまらないこと）を恐れ、他人にびるのは、他人が与える恥ではなく、（自分の）貪欲な心に引っ張られて、自分が自分を辱めるのである。貪欲さが止まないのは、死ぬという大事なことが、今ここ（目の前）に来ていると、はっきりと知らないからである。